

理数系他学会との連携協力

我が日本化学会の化学教育に対する永年の取り組みと実績は、他の学協会からは一種羨望の目で見られるほど、歴史も古く、かつその内容も深く広いものがあります。しかし現在でも、化学をとりまく世間一般の人々から、立法・行政・報道に携わる人達に至るまでの、科学や科学教育に対する認識の仕方には歯ぎしりをする思いがあります。更に今後益々、科学の普及活動を行うに当たり、化学の分野だけでなく他の専門分野との協調連携が不可欠な状況になっております。ここでは、本化学教育協議会が理数系他の分野の学協会との間で行っている連携協力活動について簡単に紹介します。

それには、現在二つの大きな場があります。一つは「学術会議」、もう一つは「理数系学会教育問題連絡会」です。

学術会議

正式には日本学術会議と呼ばれ、日本中の人文、社会科学、自然科学全分野の科学者の意見をまとめ国内外に発信する、国を代表する機関です。約1,500の学会や協会が学術会議に登録しており、文法経理工農医という七つの系(部)から、210名の会員が選ばれています。化学という学問領域は広いので、会員の中で、理工農医という四つの部にまたがる13名が中心となり、化学研究連絡委員会(化研連)ができています。更にその下に、48名の委員を補強して、物理化学、無機化学等の五つの専門委員会があります。

化研連は、化学の専門領域での諸問題をもっぱら扱うわけですから、教育に関しては、大学生以上のいわゆる高等教育が中心となります。化研連の中に化学教育小委員会があり、その他、物理学や数学の関係の研連にも教育関係の小委員会がありますが、これらの委員会との協力活動は今後の重要な課題と受け止めております。

一方、初中等教育に関しては、学術会議の中に科学教育研究連絡会(教育研連)があります。その構成は、1名の会員の他に、科学教育学会、理科教育学会、数学教育学会、物理教育学会などから推薦された11名の専門委員からなっています。化学の分野からは、私が委員として、伊藤卓氏がオブザーバーの資格で参加しています。

日本化学会の教育への取り組みの実績から見て、教育研連での立場が「弱かったことには」次のような事情があるのです。学術会議は、学協会の集まりの上に成り立っているのです。科学教育関係では、通常は上に例示したような「何々教育学会」の代表の中から研連の委員が選ばれるのです。

化学教育協議会

それに対して、日本化学会では、教育は化学会全体の重要

事項であるから、敢えて「化学教育学会」を作らずに、化学教育協議会という組織を日本化学会の中に置き、学会全体でこの活動を支援するというスタンスをとったのです。化学会の七つの支部でのそれぞれ伝統と特色のある化学教育支援活動を、化学会の全国組織を利用して全国に浸透させようという趣旨の下に、平成9年3月に化学教育委員会を発展的に改組して、日本化学会化学教育協議会が発足したのです。「化学と教育」誌も協議会の機関誌という位置付けになりました(詳しくは、「化学と教育」1997年(45巻)7号を参照)。

そういうわけで、日本化学会は教育研連の中に足場をもたなかったのですが、私が会長を務めていた化学ソフトウェア学会(現日本コンピュータ化学会)の事務局長の吉村忠志氏が教育研連の専門委員に選ばれ、また佐野博敏、伊藤卓卓氏等の個人的なご努力もあって、日本化学会の科学教育面での実績が教育研連の中で評価され、日本化学会も準メンバーのような形で認知されているのです。教育研連では、初中等教育にウエイトを置き、範囲を科学教育内に限らず、シンポジウムを毎年行い、学会間の情報交換だけでなく、立法行政報道関係へのアピールも行っております。

理数系学会教育問題連絡会

一方名古屋大学の数学の浪川幸彦教授が中心となって、数学と物理学の有志が「数物系学会教育問題連絡会」をつくり、教育の問題について協調的に活動を進めていました。化学会も平成11年からこの集まりに参加し、「新教育課程に対する数学・物理・化学系諸学会の見解」という共同声明を文部省の記者会見室で行いました。応用物理や応用数理の学会も加わった8学協会がそのときに名を連ねていました。

以後もほぼ2カ月に1回のペースでこの連絡会というか、勉強会のような集まりは続いています。平成11年夏には、生物系の学会もこれに加わったので、現在では「理数系学会教育問題連絡会」という名前で、12の学会や協議会の集まりとなりました。シンポジウムの主催や共催、それらの報告書的な書籍の刊行も行っています。

このように、いろいろな人脈や機会を捉えて、科学の他分野との交流というよりは、共闘という形で、科学教育の重要性の認識が広く行き渡るような努力を我々は続けているのですが、小中高の現場の先生方も、その良し悪しの議論は別にして、総合的な学習の時間を活用して他教科の先生方との交流をこれまで以上に積極的に行って欲しいと願っております。それが真の科学教育の実践になるはずですが。

細矢治夫(お茶の水女子大学名誉教授)

化学教育協議会・議長